活語指南

服部文庫
イ17
453
2

117
453
2

變格活

第十五

こ　將然　で　ぬ　ぢ　む　ナド受ルハ將然言ナルヿ畧図ニ見エタル。ソノナカニ
だ　ん　ぬ　ぢ　ニ受タル四首ヲアゲテ証ス。コハ何レノ活語ニモ同事ナカラ。
五十音ノオ五㋐韻ノ文字ヲ用ラキニセルヿハ。タヾ
此ノ三ユエ念ヲ入テ初学ヲサトサントハスルセ。

古三 ○ゑ月こだなくさもりあんかくまくまさ衣袖の多拔さらだや

円十五 ○咲の志ぢのねねくさもさらさきみぢこぬ夜ハされぞかぢくく

円十四 ○とろんといひしハうにも月の立ぬ乃月をまち出つるう那

円一 ○りみこぢ（泊）づ（清）ハ雪とそふりなまし消ぢハ月ともむとみましや

さ　連用

古序 ○天つちはひらけわまるる時よりいまさにろ

古一 ○掛くえこそおる常なるうけてかるどいまさあきはあり川く

源氏ナトニさく方行末ナト云ヘルハ。きハ連用言故モトヨリサルベキ理リナレド。く。ろト受ルきハきヨリ云ルヨリモ。こヨリこく。

こく。トイヘルゾ古歌古文ニ多カル。ハ衝ニ即加行ノ処。又佐行ノ処ニ　ゐく。トイハデ　ゑく。ニ付テ　其辨論アリ。ソレニツキテツラ〳〵考レハ。畧圖ノ來字爲字ノ二行　こ　き　く　せ　し　す　ト図レテ。こヲモせヲモ一分連用形ニベク物スヘキ。刻〳〵ヲ将然受ル辞ノツラヘ上グヘキニハアラサルナリ。ヨク辨フベシ。

く　截断

古三 ○東のくよりくれへまうでこくてきて

古二 ○こがせこがくへさよひきうさくがこの蛛のふるひそてきるくも

くる　連躰

古一 ○うぐひすの谷より出るなくハ春なくることをたれかきらはしく

円 ○春やうの花をがてらくる。人ハちうきん後ぞこひくかるるき

くれ　已然

古三 ○あぐなるかたうるきことのみいてくれぬ

古十三 ○思ふれどこひくきはたいくりのひより月の出てこそくれ。

ここそトカリテ截断トナル

こ　希求

古十四 ○陸奥のいぐちの真弓ひらだきるさへよろこのびくす

万七 ○佐く張のなくくら山に雲みれハ雨ぞふるてふかへりこことがせ

連庫　友来吾背

右ハ來ノ活キノ下ヅノ定ニ。尓ニコノ用言ハ他ニ通暢セヌ不共ノ趣キアリ。ソハ下ヅハ衝上ノ十五云々るといふ詞云々おもはるのてにをハ云々さよりのミ受る格なるをそれハいとまさりてこしこしこしこしあぐこよりの受けるる多ク云々下知の詞コハこのミいへる例ニトイヘルハ。ウベナルカナ。サレドこニよりソヘテ希求トセルモ下レ下レハアリ。ソハカノ四段ノ活語ドモノけ。せ。へ。め。れニよ文字ソヘタルモラリくハアルト同例ニ。落窪物語ナドハ多クレカリ。兼浦集ナリレカトオボユルニ。とうれても狂おられずうちおのひとくめぐるこよ。夜の浮ゐ。コノ類古キ哥文ドモニ猶アリ。又おおニテさラ受タルハ。源氏榊巻ニ絡ろ文おくてさしかくの事をくトアル類ヒラリくアレド。ソハゲニナホ少クテカノ古今ニ。人ふるさと里をいとひてこしろぐもあらの旅もうき名なりけり。後撰冬ニ。时雨とはたまちるぞあくトイヘル如ク。こラくト受タルグ多キ。コレハ猶コヽヤカナルハ友鏡底廻影ナル図ラミテレルヘキ也。抑此來ル活キニテハ希求ハこトノミ云ガ下ヅノ格リナルウヘニ下レくニハこよトよモジフル支アリ。又次ニ示ス為ルノ同レ活キナルおとするトイフ詞ニテハ。たとせよト云ガ希求ノ格リノ下ヅノ例ナレド。下レニハおとせトノミイヒテ仰スル詞トセルモアリ。コレラノハビ其クハレキハ山口栞上巻ノ末ラミテ曉ラムベシ。

△第十六

せ　将然

○古一 見てのみや人にかたらん桜花手ごとにをりて家づとにせん。

○古四 をみなへしおほかる野べにやどりせばあやなくあだの名をやたちなん

佐行ニテ此変格ト云ベキハタラキ詞ハ、為ルトおはするトニツナルヿハ八衢上巻四十四丁ニミエタルガ如シ、ソノ中ニテ為ルト云ルニツキテ今ハ五転ノ例証ヲ一ツ二ツ出スナリ。おはするトイヘルニツキテソノ五転ノハタラキサマノ正キ、又聊異ヤウナルナドノコトカナルヿハ、山口栞上ノ四六ヨリ五三マデヲ見テ知ルヘシ。サテ志ゝノ二ノ辞ニウケラル、キハ、せ文字連用ノ段マデ及ビ下リヌヘキヽ、加行変格来ノトコロニイヘルガゴトシ。

志　連用

○古羇 仁和の中将のみやすん所の家に歌合せんとてしける時によめる云云

為果る。しへしナド、アグルニタヘズオホシ。

し　截断

○古羇 なりひらの朝臣をところさだめずありきしとおもひて

○土佐日記 うまのはなむけし。夕門出しナド。

する　連躰

○古四 秋の野にみちもまどひぬ松虫のこゑするかたにやどやからまし

すれ　已然

○古三 五月まつ花橘のかをかげばむかしの人のそでの香ぞする。ぞトカヽリテキル、

古三 〇夜の衣のうらゝ〜なれバ・時をなく〜一ツ石ずつのこる〜の〜え
古四 〇こよひこん人はあハ〜たるゝの久〜ゑ・おどんまちもこそもれ（たそトカリテキル〜）

せよ　希求

古七 〇ゑよいひ者ゝやゝ代こうそへてとゝめたきてハおりひてこせ〜
古物名 〇足引の山べゝをれで者〜雲のいろゝせ・ゝとゝもるゝ〜〜ゑたなき

コノ用言ニツキテモ・八衢上ノ二ニ・ニイヘルヿアリ・イハク・者〜〜云〜
せ〜〜せ〜〜ゝおゞせよりのミ受るゝ〜・コレハカノ来ノてヨリモき
ヨリモ受ルトハ又異ニテ・者〜〜者〜〜ゝトイヘルヿハ一モナク・イツ
モイツモせ〜〜せ〜〜ゝトイフ例ニ・コノ格モ底廼影ナル図ニテツヾビ
ラカニ・サテ此佐行変格活詞ハ夥シケレド・原ハタヾ二ツニ・其一ハ

ゝ為ルニ・今一ツハれたする〜・カクテれたるゝト云言ハ・下コトニヨクセ
ズバタカフ丁多カルベシ・山口栞上巻四六ナル辨ノクハシキヲミテ
暁ムベシ・希求ハ せよ れたせよ ト云ガ下ヅハ定格ナレド・稀々
ニハれたせト・よ文字ソヘズテタヾニ仰スル詞トセルモアルヨシ
ナドモ・山口栞ヲダニ見バ精細ニシラレヌヘシ・

△第十七

コヽナル活キノ詞ハいぬる者ぬるノ二ツノミニト八衢ニイヘル・ゲニ然ヘ・コレ
ニヨリテ次々五摶及希求ノ六ツノ活用ノ例・此二語ヲ各一ツヽ出シテミス
ベシ・但シ右二ツモ実ハ一ツヘ・去ル二過ル言ノタヽリテすぎぬる・ソレカツヾ
下リテ去ぬるトナレルヽ人ノ亡スルラすぐるト万葉ナド二多ク・今世モモッパラ云丁ヘ・

か　将然

序 〇君〜けさこそ〜〜れ春のれさそいるだ者〜さとにさえやてうらん
古十一 〇者ゝ者ゝあバたゞ名れたゞ世の中の為なきあといひハなれも

に　連用

古十一　〇こゝ〜ここ命をうるはなくばあらじハやまくぞあるべうりある

古五　〇乃あらくだ乃ゆもゆんりみぢをぬさとも白て秋ハいこりり

ぬ　截断

万八　〇足引乃山之黄葉今夜毛加浮去良武山河之瀬爾

古十四　〇こゝ〜と八波ろおづけ〜ん事あらんあぬとぞたぐこいしへうりある

千十六　〇ちぎりおきさ〜させもが露を命にてあれあらばの秋もいぬめり

ぬる　連躰

古十二　〇あぬる命いきもやあるところみこむのをだう逢んといきあん

万十　〇玉日坐こいぬる。常なきこゝろまたもほせられを

ぬ　已然

万十六旋頭　〇いさなとりあやあらしける山哉死爲死許曽海者潮干而や匂ゆ枯れられ

万九長哥　〇こもりぬの長さだへ長て打歎き妹ゐ隠いぬれバ心をとて去者血沼井士

沼下延

ね　希求

此ねうやどどトウクルコアルヤウニハちまくニハ図セレド・イカゴシ・今此略図ニハ其だどどハタだぬれンウクルニテ・ねハ希求ノッラノミニ図セルヤウ心ラッケテミヨ・上ニ引ケル万十六ニノ死許曽ラレ子バコソトヨノバ・ねト受ルナレドソハ叶ハジ・

古十　〇こゝ長ねとまるとざあらしうぐむのよるえすがゝこ爰ふええつ

古十五　〇妹の田のいねてふ〜もくけなくふ仁をゝ〜とう人のかるらん

此第十七ノ活語ハ、上ニ云ル如ク・往死ノ詞ニツノミ・但シ常ニてつ

□れ□ニタグヒテてにををハハトイヘルこぬぬるぬれモ

此才十七ノ往死ノ同ジ活ヘ・サレバてんてぬ□□ニタグヒテハ

なん　なり　なぬトイヒテトヘ二類テハ孫ニ云ヘ。此ノ玉緒六四丁　ニツバラ也。
サテ其テフバ多行下二段ノ活ノ処ニ六例皆出レツレハ。今ソレニ
准テコヽニ此なゝぬるぬれ　ねノ六例ヲ出シ示スヘシ。末ニ廿一三出ス。
〇　ノてんつるトはてん　たつるナドノテツト全同ナレトオ廿二三出ル所謂テニヲハ
ぬるト今コヽニ云ねぬるトハ五段ノ用キ様同カラザルヲヨク分キテフベキコトノ。
古八
〇タくれのまゝさハ山と云へなゝんよるハ越ゝとやとりとるなく
コノアトナルなんハ宿をうらなんナドノなん。上ナルなハなふぬ
ト活ク詞ノ將然言也。
古序十
〇花もくさほゝ出もへきさくもあらぬなりゝたり
たりトウクハ連用言ヘ。亦其ハ第ニ。りナドノりモ此連用言ヘ。
古一
〇年ふれどよそひハ老めしうきけれど花をしれバおろひもなし

コレハ截断。
古十七
〇後山いさ立よりて又てゆくうんうんへめる身をおいやしめるや
「身ト云躰ニツラナル」
コレハ連躰。
古十八
〇こびめれど身を浮くさのねをたえさそふあらぬハいなんとぞうか
「已然言ラバト受ル」
コレハ已然。ツギニ希求ノ例ハ。
新古恋一
〇玉の緒よたえなバ絶ねながらへば忍ぶることのよわりもぞする
堪忍性ノアル時ニ命モ絶ヨト希求コトバノ孫ヘ。古今詞書ニなやうアリ
ねといひれハナドア
ルモ全ク
コレナリ。又上ニ云てんニタグヒテなんトイフハ
古四
〇形めてゝ云の紫とたかへしてん　とう分ふるれバおさ分なし
古十八
〇いざこゝふ分世そ見なん　芝ハゝやふゝみの星のひれまくもをし

右等ハ迄〜ぬんトイヒテモ　何ニシテモ同意ノ如聞ユルヲ　てトちト並フ　ヒ・タグヒテトモ　云
経　てんトカヘミテモ

〇又てめニタグヒテなめト云ハ。

古一　〇ちりぬれむこうれどちるこあさ拙をゆふこそさつ〜をつハれりてめ

古二　〇春あさこそ花の盛ハりぬ　めどゆひうんてとけいのちなりりり

又てぬトちぬトナラブハ

後三　〇うくぬぐ〜ちぐでよをやハつててぬちれのときえも有トえるべく

月十一　〇乃ちら〜やみやハちちぬゆふ坂のせきのゆちるさハ海といふせ

又てよニタグヒテハ孫ト云ハ

彩古恋一　〇紅波うみしうさ芦れふ〜のまもあさでけををさ〜てよやや

月　〇むの孫よたえちハ〜えれ　なぐ〜へバ思ふるこめよろうもぞれる

右　ちんむ　めきこぬぬるぬれれハ大氏自然言ヲ受。　細カニ論ゼハカクノミモイハルヽジケレド大凡シカヘ。

てんむ　めきてつつるつれてよハ凡ソ使然言ヲ受。

●下二段活

△第十八　●阿行

え　将然

五十五　〇ちさびもまとけうえんやさある板のいめにも妹ごこえぞ〜なくに

え　連用

古序　〇これうきこえてうるところえめ　コレハ連用　あさがひこちんある　コレハ将然

後拾恋　〇かくとだこえやたいひさのさ〜もちくじをうるうひを　やさノ辞ヲハサメレドえソムト波行四段ノ用キ言ヘ連ケル

ツイテニ云ン。カラブミドモニテハ。得言ヲバ訓ジテハ。「イフコトヲウ」。

或ハ「言フ事ヲエタリ」トヤウニイヒ。不得日ヲハ「イフ事ヲエズ」トヤウニヨム事ナルヲ。御國詞ニテハえいふ　えいせば　トヤウニゾイフナル。コレモコヽロエオクベキ事ッ之。古事記傳ニ此弁アリ。但シ然ル上ニ又細論アリ。題しらべト云書ニミエタリ。

う　截断

○（イセ物語二八）女のえうまじかりけるを

此類オビタヾシ

うる　連躰

○（万十五）しましくも独りありうるものにあれや島のむろの木離れて有らん

うれ　已然

○（拾遺恋）あき名のみたつの市とはさわげどもいさまた人をうるよしもなし

えよ　希求

○（順集）いかにして花をハつましものからをそらにつゝはるつゝもこそえれ」

○

△第十九　●加行

自下下二段活等ハ。例夥クテアグル事デモナケレド。初学ノ為ニ二首ツヽハナホ出シテントス。

け　將然

○（古三）むらげあけバ君が名たちぬべみあぶくこゝ紋人みけんかも

け　連用

○（古序）あめつちのひらけはじまりける時よりいできにけり

く　截断

○（古六）たつた川錦おりかく」神な月しぐれの雨をたてぬきにして

くる　連躰

〇古四　谷風ことくるゆのひまでとうち出るたゝみやまのたゝなは

れ　已然

〇古五　秋のひとりみちをぬさとてむけれバ手むけ系さへぞ旅ゝちする

けよ　希求

〇古六　ゝれ系八十岩ゝけ系こき出ぬと人ゝはつげよ沖まのつり舟

此下二段ノ用キノけせて孫へめえれ系ヲ其下ニテよ文字

ソヘズニ・タヾニ希求トセルヿ古キガ一躰ト云フカモムキニハち

まゝ上ノ十ニハ三エタリ・ゲニサヤウト思ハル・然レモ又思フニ・ソハ

ナホ下二段活ノ才四音シ下知ニセルニハアラデ・下二段活ト後

ニハナレル詞ガ古クハ四段ノ活キナル（ソノ明ナル例証ハ・恐リ隠リナド・山吹栞ナドニツバラニ見エタルガゴトシ・）

故トモ云ベキカ・躬恒集ゝ塩ゝてだ入江のあゝふゝやまのゆゝしろの

浪ゝよせよ沖つ浪・カク字アヿリテハシラベムツカシケナレド・オク

ベキよ・モジシカカヌヿハサスガニアタハザリケンナドヨリモ考

フベキヿゾ・

△第二十　・佐行

せ　將然

後廿十五　〇ゝゝ川の流のいゝみまおゝしれどゝゝゝ人をよせじ・ねをや

此よせじ下二段活ヲよさじ四段活トハイハレヌニテ准シテシルベシ・合せじ下二段

仕せじ下二段ナドヲ・合さじ四段　仕さじ四段　ゆさじ四段ナド云ヒテハ語

ト、ノハヌヿシ・初学ヨク心ヲツケテ畧図ヲミルベシ。

せ　連用

古七　〇つる垂もちゝせの後たゝなゝかあねゝろゝまうせたゝん

右ヲまうしたゝトハイハレヌゾ・坎畧圖ニ心ヲトヾムベキ要コ

コラノヿヘ・但ゝる八下二ノ用キナルニヨテ・たゝ伝ヒたつる伝

フ用言ヘハ必セヨリウツレリ・必ゝ〳〵ヨリウツスベカラズ・坎訓

ハトモマレハ人ノ誤ツヿヘ・鈴屋集ナドニサヘ・之ガ用ヒ

誤アリ・雅話二編ナル但ゝや・おのノ条ヨク考フベシ。

たて　截断

万八　〇吾君ゝ見けハ恋らし珍ひゝる夢花をゝへどいやゝ増せゝやゝ

截断言

たゝる　連躰

古四　〇河風のさゝゝくもひるゝ折ゝよゝる波ゝたゝやあきたつらん

コレヲ折ヨリ伝トハイフヲジキニ例シテ・但ゝ人食事ナド

三ナヒガヿニテ・必但ゝる人食ゝる事ト・様ニ云ベキ程ヲ察スベシ。

それ　已然

古十三訓　〇我ごゝ人をふせゝまもらゝれたいきけれどえあたゝ

「已然ヲむトウクル例ノヿ」

スベテたゝノムスビヲせ伝語ト・こゝノムスビヲれ伝語トノワ

ケヲシルベシ・きゝ〳〵せ〳〵ゝ〳〵トイヘルモきゝ〳〵ゝ〳〵トイハンモ・何ノワカツベキ

コトワリアラントヿヘル説ヲ然ラズトテ論ジツメラレシコト・さ

しでのいそニ

見エタルヲミヘシ。

せよ　希求

三ツ子集　〇塩みてゝ入但のうゝもふゝやまのあゝろれ演ゝよせゝよ・沖り但

コレヲ三ヨ・下二段ノ用キモハ必ず文字ソヘテ希求トスルガ通例ニ・よせ沖つ浪ト云ヘハ七字トヽノヒ字余リニナラズヨキ様ナレド・貸ル足ル刺ルナドノ如キ四段ノハタラキコトバトハチガヒ・ず・よ・ち・カ・ノ・イ・ケ・ア・ハ・セ・ヤ・ワ・ナドハ・せよトイハデハナラヌワケトクト合点シ玉ヘ・

△第廿一・多行

[て] 將然

〇古十七 大うは月をもめでぐ・そこのつれバ人のをとなるめ

[て] 連用

〇古十三 行人もこめりのゆきて常のなきりるえぐをわでけるうら

孫ての彩けの雲のふりたもナドヤウニテ・ヲツカフハ・下二段ノ連用言ヲ躰ニ云ヒナセルニテ・ろひいでこせんノいでナドヽモハラ同ジ・サレバ紐鏡ニハ才廿六段ノ[つ][て]才二十段ノ[つ][て]トワカテレド・今ハコレヲ一ツニ一ジヘテ引証スルヘ・

[つ] 截断

〇古十三 ゑ〜〜バ志ろ〜をろへむ〜さんのねりの衣をよいづなゆあ

勿ノをシテ受ルハ必截断言ナル例ヘ・但シ初ニ云ル如ク・コノ莫ハ右様ニ用フハ諸活語ヘ付キハセザルヘ・略図ニテハ加行変格來ヲヨリ勿去ニデヘ・コレト同意ノ語ヲ勿来ヲ於邑莫出奈ト様ニ用フキハ・用言ト用言トノ間ニ挟リテ・其ヒハ連用言ヲ・ト受ルヘ・サルハ躰言ヲウケ連用言ニテ治ムル雲莫棚引人勿咎ヲナドヒ円シ様ニテ然用フヲハ畧図ノ過去ケ・不ズ・将ノんぐヲ除テ自余ノ諸活ヘハ皆渡ヘ・又坎截断言受ル莫ハ上ニイヘル如クソレヨリ狭ク形狀言ナドヘハ皆及ハザルヘ・

[つる] 連躰

古一 ○谷風にとくる氷のひまごとにうち出づる波や春の初花

六帖二 ○まくれどもあらんとおもふこころこそのちのためにもまたちいつれ

〔つれ〕 已然

「こそヲ結テつれトイヘル八已然言ナル例之」

此ハテノ句後撰ニハとまれに立ければトアレド。六帖ニテハ立出ヨニナリ。

受辞ノ方ニテ証セバ。世中ハうき身にそへる影なれや思ひすてつれどもはなれざりけり ナド類多シ。

〔てよ〕 希求

百十 ○こもりのみ恋ふれば苦し撫子の花にさきいでよあさなさなみん（隠耳 開出与 朝旦将見）

カノつ。つる。ナドイヘル辞モコヽノ用キ詞ノ一ナレバ。久かたの天の河原の渡しもり君わたりなばかぢかくしてよ ナドモ上ノ

咲いでよト全ク同例之。

△第廿二 ・奈行

ひもろきニ寐ヌるヲ才廿一段ニシ。尋タツヌるナドヲ才廿七段ニ挙タルヨリミレバ別ナルサマニ似タレド。寐ヌるモ尋タツヌる 付ユダヌる 摂フサヌる 兼カヌる ナドヽ異ナルコトサラニナシ。サルカラニ一首ヅヽト例ス中ナレド。コノ行ニテハアルハニシナラベ出スベシ。ソノ一ハ寐寢ノ字ニアタル語。一ハ自余ノ諸ニ當ル言。

〔ね〕 将然

於イ恋一 ○足引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねん

古八 ○君がゆく越の白山しらねどもゆきのまにまにあとはたづねん

〔ね〕 連用

「此連用言ヲ受ルてハつ。つる。つれト活ク」

古十六 ○ねてもみゆねでもみえけり大方はうつせみの世ぞ夢にはありける

此ねハ将然言ニテでトウクル此でハずしてノツヾマリタリずハぬ。ねトハタラク

百十八 ○としのうちのことゝふるねかち云云

〇ぬ　截断

〇つゆもなき人をやねらく小萩のたくゝハあげきぬゝハ志のゞん　一五十

〇ちゝこのうへまうふさゝをたつぬゝそうらぬやまのなりつるふ　全集春

〇ぬる　連躰

〇ちりをだにそゝぐとぞうゑしよう味ゝとゞぬる床夏のたれ　古三

〇こ海のゝいくまちうん年ふゝもたづぬる人もあゝどゝ忍へバ　古十五

〇ぬれ　已然

〇忍ひにくゝぬれぬゝやゝ人のえつらん美ゝちりせけそゝぎまゝを　古十二

〇ふるゝのこ海のゝ山ををぬゝどもそゝぎまけ月の影ゝもみし　後拾雑一

〇ねよ　希求

〇うゑ人をねよゝのこハうつれゞ志をゝもへバいねてぬゝも　万四

〇こゝ海やこゝをの中ゝそまたてゝつくりさねよちよあまゝくゝ　拾イ十

〇第廿三　●波行

〇へ　將然

〇ちゝに鳴てひちゝゝかゞもまこゝ百ゝめれゝゝ神ゝゝそゝゞこゝゝ答　古十二

〇ゝゝとせまでゞ限れる松もりあようハ志よひられてよろつ代やへん經　拾春

〇へ　連用

〇菊のそゝうゑたりりこゝふくゝたへゝゝうりる家　古五引

〇かゝゝバうりへゞくゝこゝゆるよの中ようゝやまゝくゝもあるゝ月こゝる　拾注

〇ふ　截断

古十五 〇こわのこいうゝ伝うん〜ふと〜ゐめる人もほらじと思へど
紅

相つか 〇えゝふ・ま・ゞうゐいたまふゝ
堪

ふる　連躰

古十七 〇住の江の松を秋ぜふ〜うらまこ〜ゐ打そゝふる沖つ波ゝ
添

古九 〇よめるとゐんかうつゝふる「云ゝ
詞　傳

是ハなんトカゝリテふるト截断セルナレバ・タゞ切ルハ伝ふ

ト云ヘキ丁自ラシレルベシ・カノあごとくのふるあまのよひ多

ナドゝ同例之・

ふれ　已然

古十八 〇ゝゝゝ〜ふ・ば・ゞまふ如を年といひてと年はいゝ〜ゐぞ〜ふる
数

古十八 〇と〜ふ・ば・だよもひハゐぬゐはほれど花を〜ふれバ物ゐひもなし
紅

へよ　希求

古二 〇花ちゝ〜ふ風のやゝうゝ波ゝ〜ふれゝを〜へよゆきてゝうゝん
教

ツイデニ云ン・源氏若紫ニいさたまへよをゝ〜ゐ給云ゝ・同藤裏
給

葉ゝゝ也〜むへよゝゝ云ゝ・コレラハ四段ノ活キノへハタゞニ希求

ナレド・又丁レゝニハカノよ文字ソヘタル又ノ例ゝ思ヒ丁ガフ

ルヿ勿レ・右教へよゝト云ヘルコレト同シク・下二段ノ活キノへ

ニよモジソヘタルハイトオホカル丁ニテ・後撰三詞ニモこの花

ゝん〜ゝへよゝ〜ゝゝれゞナド・コレラハ教へト云ヒゝ〜へ

ト云ヘルノ三ニテハ不成語ト云ベキ丁ヅノ格ナルヲ・カノ給へ

ナドハ𪜈ヘ𪜈ヒヘルノミニテ其語ヨクトヽノヒヨ文字ソヘタル方ハ却リテ俗ニ近キニテ𪜈ヘヨノ同例ニテハナキゾ

〇

△第廿四　麻行

め　將然

古十七　〇天つゝぜ雲のゝよひぢ吹こぢよをとめたをぐさおだ〜ちぞめん

め　連用

古十七　〇赤こゝろあぐさあゝみつさらしなやをぞ拾ふてる月をこんて

む　截斷

古十七　〇木ゝ〜ハゝつて木殖じほゝぐさ来咲ことめてこひまさゝしむ　恋　令　益

令　〜むト云語ノ用キハ麻行下二段ニテ求む　止むナト、全同ナレド、坐〜むニカギリテソレガ上ニタツ語ヲ受ルヤウ外ノ語ニ異リテ普通ノ連用言ヨリまさゝ〜〜むトヤウニ云例ヘ　求む・止む・勤む・ナト多クノナド二類ヲヘ考フベシ

むる　連躰

古二　〇梅花〜ちよるだゝりしよりくのとがむぷ春まぞ〜ゝる

むれ　已然

後拾秋　〇さび〜さに宿を立出てあがむれどいつこも同〜秋の夕ぐれ

コハ一本なゝむれど・ナルヲ・ど・トウクルモ・ど・トウクルモ・トモニむれハ已然言ナル証ヘ

[めよ] 希求

古八 〇おほ坂のせきしまさしきはあらはるゝ君をとゞめよ

△第廿五　●也行

[え] 將然

古十七 〇爰まだきうめとハえじ（コハ截断ユエトトウク）（コレ正クコノ証ニトウケタレバ）

[え] 連用

古九 〇きえたつる時しなれバこゝぢなる〻ゝ山の名ハ雪にぞ有ける

[せ] 截断

百三 〇たらやのうちまでゆせ（細川ナトあごとのつるにちれよびこゑ）

[せる] 連躰

古十 〇かゝみのうけまえせる雪と浪とをあげさゝ

[せれ] 已然

古十一 〇梅ゝなまよわふ玉ぶえ〻〻ぶ山やゝこゝあれど春くぞ有ける

[えよ] 希求

〇

コヽニコトワリ置ヘキコアリ。古今十九ふゞのれのあらぬ思ひて

りえだかえトアルヲミテ。初学或ハコノ才廿五ノ希求ハタヾ

えトイヘル例ト思フコアランカナレド。コノりえバりえハカノ

順集ニさやくまよそ〻トアル如ク。古キ処ノ別ニツノ格ニ

乞アレ。ナヘテハえニよモジ添テゾ希求トハスル定ゾ。思ヒタヾ

ヨフ「勿レ」

△第廿六　●羅行

れ　將然

古四〇陸奥のちのふりぎぞうの白ゐと乱れんとぞふ赤なゝ〜ゐ〜ふ

れ　連用

古一〇たゝる毎ゴとなゝる〜川を花とえてをられぬゐゝ袖やぬれぬ

此ちんハ。ちんトノ合ヘルニハ非ズ。都テ連用言ヲ受ルちんニ又カノ

こゝる〜もかへり来なんこゝひこちんナドノちんニモ

アラズ。ちんニ二ツアリテ一ツハ將然言ヲウケ。一ツハ連用言ヲ受ル「畧図

ノちんトちんトノ処見ルベク。此弁別ハ玉緒繰分三テ詳ニスベシ。

古四〇やゝうせ〜人のゝこみゝふぢむゝ波ゝをられぬ。ゝ紅葉に白ひり〜

る　截断

古五〇ゝつゝ川りゝちぢだゝゐる。神ゐみのこむろけ山ゝ去れゐるらし

ゝ　連躰

古一〇たゝるでゝにゐゝ川を花とえてをられぬゐゝ袖やぬれぬ

るれ　已然

古五〇次ゝゝゝ秋のゝき木のゐをゝれ。だゝへ山ゝ紅を嵐といふらん

れよ　希求

古二〇よそゝゝえそゐらん人ゝ義の花をひまつれよ。えでゝ折るも

△第廿七　●和行

ゐ　將然

古二
〇宿ちくうめの花う名じあぢきなく佇人のうゑにやまこれり

[ゑ] 連用

万二
〇おきさえのうにうゑ居ゑれども

又万五長哥ニまづ志さひとめちくさくハうゑさむからん　人乃父母波飢寒艮年

[う] 截断

イセモノ語廿一段
〇ゆきもれ来うくとだまきくねちらバゑひりとけ志ちもゑなましく

[うる] 連躰

後扞賀
〇君ガくあらつしてらいる呉竹ゑ代もこりれる公地ゝ牧さもれ

万十五同五人のうゝる田ハうゑまさむ言　躰ニ連ゞ言　用ニつゞく　ゝコレハ一連ニテ連躰連用ニッ明シ

[うれ] 已然

〇

[ゑよ] 希求　順集ニ・ゆゑなハなちそゑくゝまゝ居ゑト・ゑモジノ三ニテよゝ添ズシテ希求ニツカヘルハ・都テ古キ一格ニハ例アルヿナルウヘニ・カノ哥ハゑゝ始ト終リニ置テト勤メタル哥ナレハ・サレバゑよト云ガナホ希求ノ言ノ都テノ定例ニハアル・カミニりえ大りえト云ル哥ノサダメセレト台考・

〇

●中二段活

△第廿八　●加行

〇

[さ] 將然

万四
〇家人ゑ恋ちぞ過ざめやる川ぼゑくいづこのさゝゑさゝのへめれど

[さ] 連用

古五　〇神なびの山をもぞさゆく秋されば時雨川なぞぬきくハたむくる

く　截断

古十二　〇住のえの岸によりるなみよりるさへやゝ夏のゝひぢ人めよくらん

らる　連躰

古十七　〇さゝさまに年もゆくらんみもあへぬさぐる齢やこもにゝへるゝ

られ　已然

万九　〇赤人の仮なるらしもるさめのよるれどそれをぬくれ見へぬ

避

きよ　希求

万十六　〇吾門ゝ千ゝ吉ぞ鳴たきよたきよ赤一夜妻人ゝ吉ゝきれ

起余　起余

△第廿九　・多行

ち　將然

古六　〇雷ふりてらゝのれぬる時ゝこそつひゝよりみぢぬまつもええゝれ

（咲ぬハ不ノぬニテ將然言ヲウクル）

ち　連用

古序　〇ゝつゝ哥のゐゝさぢゝをへど又〇とゝ毎ゝ秋そ悲きもゝちゝつゝ等

（亦古秋）

つ　截断

古十七　〇おりひせくゝこゝろの中の消ぬれやたつゝハみれど吉のさゝえぬ

コレハ截断ヲトトウケテ下ヘツヾケリ・又下サレクツトキレタルヲ示サバ

清正集　〇きゝそめの衣よそおづ三ゝめたりひおつるゝハ放ゝくるゝ邪

つる　連躰

古五 〇秋の月山をさやかてらせるハたつる袂乃くもをみよとう

れ　已然

六帖 〇かりたてをだ刈こそそおぶ乃田のふるくこもいまハやめてん

ちよ　希求

古十七 〇天つ風雲のかよひぢふきとぢよをとめのすがたしばしとどめん

コノ中二段ノ多行ノ活キニ滿ナドハ用フベカラス。世人多ハ誤レリ。ミツ

ト云詞ハ四段ニ活クト下二段ニハタラクトニツアリ。細論山口

栞中巻ニ出タリ。

〈第三十　波行

ひ　將然

古十二 〇山ちかみちるもくるのちるこのみなりてこひんちひハしぬとも

ひ　連用

古十二 〇玄日神のゆきすをぬてれひいるくるまけなるこみえし君ハも

ふ　截断

円 〇夕くれハ雲のハたてふねそれすしちつそなる人をこふとて

ふる　連躰

〇玉の緒よりえなむたえねしらへバちのぶるものよりもぞする

ふれ　已然

古十二 〇ちのみのれバくるしさねをを人ちれぞ思ふてふこゝたれようらん

ひよ　希求

〇さらむちひよう　漢籍訓ニ與其媚於奥寧媚於竈何謂也トヨメル　こびよ　古言ニヨクカナヒテ強ひよニオナシ。

△第卅一　・麻行

み　將然

〇古二花ちらん風のやどりハ誰かしるこれよをうへよ行てうゑん

み　連用

〇日さく花ハちりさきなげくあるなれどたれも甚をうゑハこたる

む　截斷

〇日十八能波ゑ恨むべきもたもおをいづこをゑのいあとゝたる

む　連躰

〇後拾遺一老まつ夢ゑりこゝろをおろる身ハさえゑりつゝ世をぞ恨むる

〇むれ　已然

〇金葉恋下つらゝもゑゝん人もゑハなん身をれだこそ身をバうゑむれ

みよ　希求

〇古二吹かぜをなこそ恨みよゑぶひよゑハ系やハむゑゑゑゑれたる

△第卅二　・也行

い　將然

〇古十七たいぬゝそゑどゑゑゑ身をせめきゑんたいぬバゑゑこゑたまゝゑのゑ

い　連用

〇たいぬゝそゑどゑゑゑ身ををめきけんおいぬバ云云

又ゑれをゑゑふ人をたもゑぬ報いゑやゑゑゑふ人のゑれ紙老

ろくぬトアル・此むくいハ連用言ヲ躰ニ云ヒナセルニ・抑報いハ
報ぴトスルハハルカ後ノ了・モトハ也行ノ活ナル了字鏡ニ年久以
ト書ルニテシルシ・猶山口栞ニクハシキ説アルヲミヨ・

古十七
〇たちくさハ月をもめぐりこれそこのつれだ人のたいとなるもの
「コレモ躰ニセルニ」

万十
〇こいまろび・・・・こいまろび・・・・ふしハ死ぬもいちじろくきこハ出じ胡ぐかのくもを
展　摶　灼然

こいまろびハ・コヤシ一ロビニテ・ころびふし義ニ・展ハ老悔ナド
同活ニテ展轉シテ卧スルヲこいふもトモ云ニ・万五長哥ニモ
宇知比佐受宮弊能保留等云云・等許自物字知許伊布志提云云

〇廿三

截断

万三
〇妹も吾も清之河のかたぎりのいもがくゆべきころもかもこ

ゐる　連躰

元輔集
〇秋ふかみまがきに色ゐる菊ばかりうへしもかれぬるを

ゐれ　已然

加茂保憲集
〇君毎に人ハ色ゐれどあるはなる

いよ　希求

ウヲ花尼上一廿九
〇木ゝて涼さうげに立人乃まつゝゐるまでたいよ・色矣松

〈第卅三　・羅行

り　将然

古恋三
〇とのめつゝいつもで年ゐるいつもりにてり・ぬこころを人をしらちん
「ヲヲ」

後拾恋一
〇月をハやくるられ旅となるふしを思しきこのまぐもりぬら
日

り　連用

古一　〇ゆくちとりさへづる春ハ物ごとに珍らかなれどもとりわけてめ

る　截断

古二　〇花のえだハうつりゆくものを『いづれの系ゆゑとふる』なげめせしまに

ツイデニイハン・コノ哥降ニ経るヲカケタルニハ非ズ・系ゆゑるる

れバト同ク旧るヽヲカケテ・降ニヨセタルヽ・サレバコノ歌ハ

キレ処ニタトコロ〳〵ト意得ベシ・男女ノカタラヒノヲリ世ゆゑるこゝろざト

トヅキテ・ふる『トキレハセヌヽ・シカミルモヨ　イフ・ソレヲ云ル哥トミレハ世ゆゑるなげめ

ロシカメレド・今イヘル如クニミンモアシカラジ・

る、　連射

後拾雑一　〇ふるゝ・ゆハ汲の中ゆゑ世ゆゑるなげやなげゝあやまちるらん

るれ　已然

古四　〇たのめこゝ〳〵その袋今ハ返してんとゝゆゑるれバ・たゝ不なし

りよ　希求

貫之集　〇若さゝ〳〵ゆゑ山ゆゑ世ゆゑに雪ふゝりけて下りよとぞそよ

コヽニ亦又ツイテニイハン・下りよトヨヲ添テカク希求トセ

ル詞ハ・羅行中ニ段ノ活キ故・枕冊子　春曙　ニ八　ニハ車とゞまれ花

るゝ・人又ニ　ヲ　れるゝ・ゆられ送らんナドモミエテ・カウ活ニハ

ハれトハ用ラカヌ定リ・舊許ラ　フリ　れ・ゆゑトハタコテ云

ハヌニテモ明ナルモノヲ・カノをるバかりぞ女房ヲ下れる

ト云フニ説ルハ・カヘスバヽモ甚キヒガヲナルゾカシ・　イミジ

〈第卅四　●和行

此行リニハ中ニ段活語ハ元来ツモナキカト思ハルヽニヨリテ・畧図■トシテアル〳〵・カノ率ヒキヲモヤハリ一段ノ活キナラン歟ナドイヘル義・山口栞ナル論ヲ三テ考ベシ・崇神紀ノ菟岐于ヨリ三考ヘテ・八ちまゝ下ノ五ニ八ゐう。ト活ク訓アリトセル・ソノモトハ古事記傳廿一四五ヨリ出タルナメレド・傳ト同作ノ活用抄ニハ・率ヒキヲモひきゐ。トレテむきう。ト活クトハサダメタラズ・

●一段活

〈第卅五　●加行

[さ] 将然

古一 ○さゝ〳〵きにころもハゆく染てきん花のちりぬんのちれかゝさゝ

[さ] 連用

万三 ○須广のうまの塩やきぬの袖衣まゝ系ゝほれバいまぞさ刺ぞ

[さる] 截断

万十一 ○さゝ衣さるゝ袖ゝてまはいつれの人のおとゝしゝけん

[さる] 連躰

古一 ○たゝるのさゝ霧のゝゝのゝもぬきをうきゝ風にこそさゝるべらなれ

[されば] 已然

万七 ○麻衣きれバなゝらしきの玉のいもせのやまゝ麻まけさゝも 吾妹

[さよ] 希求

万十五 ○君妹ゝゝゝゝもきよゝたゝなる衣のひもをゝれとゝめやも 伎余等

〈第卅六　●奈行

[に] 将然

万三
○吾ゆめ〜耳こよく似ざあしうひの足纏（ナヘ）ゴ芽つまたぶべし

に　連用

古二
○うつせみの世も似るうさく〜花さくとみしきにかつちりヨルり

にる　截断

万八
○吾妹児ゴ家のうきつのさゆりをゆりとゐ〜ま〜バ不謂（ヨソヘヌ）云（ウタハヌ）二似（ニニル）

にる　連躰

万十九
○いもヨ似る茅とこ〜ようゑあ〜のへの山ふき流〜ま〜をうし

にれ　已然

沙右七上
○鎮西ヨ云〜眼のまゝろれ息の通ふ程こそ威勢種姓栄花重職もあるに似ま

によ　希求

○

△第卅七　●波行

ひ　將然

古八十九
○いで〜ゆうん人をうめんよ〜あきにとりのうふたれもひぬ（嘘）うみ

ひ　連用

古十
○夕されバいと〜ぐ（干）ひるゝ花とうそてヨ秋の春さへたきそりて

ひる　截断

○

ひる　連躰

万四
○吾背子を相ゑ〜ゝ日今日まゞに君ころもまハひる（乾）時もなし

ひれ　已然

○万六 ちかひれ・バ葦辺ゝさわくなるの素呼ゝ恋ゝ恋もとゞろ
塩干者　白鷗

ひよ　希求

○

△第卅八　・麻行

み　將然

○古二 七日こゞバ行ゝ八雪ゝぞ降るまし消ぞハありともむとみ・ま・や

み　連用

○古 ゆ・てのゝや人ゝかゝらんさゝむまことに打ゝ赤つとゝきん

みる　截断

○古三 くるゝ行ゝ行ゝらんさゝむちるまゝだにもみるべ・さりのを

みる　連躰

○古 らゝ・人もあきゝ山さゝのさゝ花ほゝのちるまんのちぞさうまし

みれ　已然

○古三 花ゝ・ゝ・ればこゝろさへまぞうつりけるとゝを出じひともこそしれ

みよ　希求

○古四 ゝだの雪むゝぬゝんとゝれバぬゝゝん人ゝ枝をゝゝみ・よ

万葉一ニよさゝくゝみトアルラバ・みトノミイヒテモみよノ意ニ

ナレルナリトイヘル説ハトラズ・コノ一今書ノ終ノ処ニ云趣ア

リ・ソコニ至テ曉了セヨ・

△第卅九　●也行

い　將然

竹取物語詞
○ふさ〻〻さりのいんゝもそれも外さゐへいきそれば

此射並ニ鑄ナドハ也行ノいゝ本居氏モ八衢上十四ニハ定メ兼タレド詞通路ニハ阿行ノナラズト定メタリ万葉ニ弓ヲいトヨムベキ処モアリ一タもめハ眠目ナルナドノサダメクハシクハ別ニ考アルヘシ

い　連用

万三
○まくらをのもを振起しいつるやを後ん人ハ語りつぐがひ

いる　截断

堀次百
○九まのうちよいるてふあつさゆるんくものほうにさくらを

いる　連躰

万
○まくらをうさつ矢さだちを立向ひいるまとろうハみるこゝろやけし

いれ　已然

忠史ノ集
○てる月をちこうとしもいつとハ心のそこしていねばうらう

いよ　希求

○

△第四十　●和行

わ　將然

万七
○山のまにそてるあださのもきてみんその川の流に涼立をゆめ

往將居

み　連用

〇山風（貫之集）こゝをゝりてやうめれたるコトかへるほとゝぎすぞめ〻ん

みる　截断

〇〻〻ハたつみれバヌ（左日キ）みる。『吹風と活とはおりふしちがやうん

みる　連躰

〇梅ゝえ〻ゝ来みるうぐひす（古一）ゝ〻ゝ春をうけてなけどもいまゞ雪をふりつゝ

みる　已然

〇〻〻ハたつみれバまるみる吹風と云云

みよ　希求

〇君をめバ渭ゝる沈もみうゝゝ汀のゝ川もあゝ浪しておよ（後拾イ）

右コノきる・コる・ひる・える・いる・みる・ハ・畧図ノスエ大又略示ノ処ニ今一ツ界（サカ）ヒテ。

キ	ニ	ヒ
三	イ	井
キ	ニ	ヒ
三	イ	井
キ	ニ	ヒ
三	イ	井
る		
れ		

トヤウニ暁（サト）サルベキガモレタル也。故ニ此オクニ予ガ所閑ヲ図示セントス。コヽニハ且クソノ本ヲ張リオク。ナホ今書ノ終リニソノ図ヲツバラニシ。ソノ説ヲクハシクスルヲ見テ知ベシ。

●四段活　コハ例ヲ挙ルトテモナク童蒙モ自ラシリヌベキ証ビイトノヽ多カルヲ尚一ツヅヽハ出シオクベシ。余リニシレタルコヲアナクダ〻シヤト云人モアラメド。

△第四十一　●加行

か　将然

〇古立こゝろれいなどの山の峯こゝけるまゝこゝさうど今うゝへうさん

き　連用

○古五 やさかつてうえしのそこしてあることハあるやまの風をやそなう

く　截断

○四一 ゆくべちくあるわりをれバ常のなくあるあさを胡ありくさく。

く　連躰

○四四 おくしもこあ紫ふそろけあく。麻のこゑこさく。吋ぞ秋ハられしゑ

け　已然

○古一 ねあう枝こさそみる常をもうけてあけ。ぐもいまぞ雪をふりはく

け　希求

○古三 今さくこしへうへるなかそぐれこゑの降りた我やどにあけ。

サテ此四段ノ活ニテハ ゆけ（キナ） 吟け（ナ） ナドヤウニ希求（コヒネガヒモトム）ルラ下二段活ニテハ人こえ告バ（ツ）。ナドよ文字ガ添ヘ。右ノ外 万四 天地の神もたまけ。よ草枕旅ゆく君が家こ至るまで。又 蜻蛉日記 上ノ下 火ともしつけ。よ」 同 ちるまうけ。よ。くの花れた」 源氏 帚木 山賤の垣かあるもをりくにかれハかけよあでしこの露」 是ラ皆下二段活ヘ。此四段ノ活キニテハ大氐よモジ添又例ヘ。サテ又

○古三 ちくこえびなけ。や常一こせう二こびとだこくゑ去うた

後於イ三

○こくやりりくハみ月こ降こりいそげ。や苗たいもこそれ

是等ハ希求言ニや文字ソヒタリ。是ハ詞玉緒ニ所謂歎息ノや。ニテ意バへよ。ニ通フヘ。サレバトテ●人こハつげや。祢もたも

けやトハイハズ亦・なけよ・学・いそげよ・孕トハイハズ・スベテ下二段ハ・ゑよ・ゑのね・ゑ・べよ・ナトノ類又中二段ニテハ・よれよ・いはましよ・ろよ・ゑやノ類・又一段ノニテハ・ゑふもさよ・れろたる・又変格ニテハ・ゐひてゑせよ・ナドミナよ・文字ソハルヘ・此四段活ノけせてへめれノ希求言ニハ・よモジソハヌト知ベシ・コレゾ此四段活語ノ希求ニセルトヅノ定リナル・コレニヨリテハ衢上巻九九ニ・せにいんせる下知の詞ハ四段の活にてハオ四の音けせてへめれそのまゝにて云〻下二段活ニてハオ四音ゑ〻よりゑをそへてゑ〻トイヘルハウベナル哉・然レドコヽニ今一段精細ニ論ゼバ・四段ノ活語ノオ四音ニモ亦トレノヽニハよモジソヘテ希求下知トセルハタナ

キニシモアラズ・さ〻でのいそニソノ議論ハクハシ・此次々ニモ其例一ツ二ツヽハ思出ルトヽニヲ挙テン・考ヘミツベシ・サテ一タツイデニ云ン

○古十六 作用ノ詞ノ希求言

ゆ・ゑれ・ゆ・べのさゝしんけ〻ばこゝ〻ばうたゑ・深ゑさけ咲

此けニハモジガソヒテオ七ノ形狀ノ言トナレルアリ

○万八 ゑ・ゑ引のゑさゝ〻む日なゝべてゝゝゝさ咲・ゑ・ゑだいとこひめやも

コレハオ七ノ将然言ヘ

○貫之々 ゑ・ゑひゝゑ・妹ゝゝゑ行け・ゑ・だ・ゑのよのけゝゑぜ・ゑ〻ゑ・ゑ鳥なゝ・ゑゝ

作用ノ已然言・此けニハリモジガソヒテオ七ノ形狀ノ連用言トナレルハ・

○万八 ゑ・ゑ波・ゑ・ゑゝゑ行け・ゑけゝゑせバ・ゑ霍公鳥ゑ・ゑ〻ゑ〻ゑめなゝ・ゑ〻ゑゝゑゝゑそれ

此けハ連用言ヱ爲シテウク・せ・ゑす・する・すれナドヽ活クヘ・

△第四十二　●佐行

さ　将然

古一　〇うぐひすの笠ぬぎてふ梅のむ枝てうぐ。ん　老　おいうくるやと

し　連用

古四　〇ふるにたれかくぶ。のうきくへうる秋の長の月

す　截断

万四　〇春日野ゝ霧ある雲の春ハ〳〵ゝ[illegible]ハ惑ま。ん　月ヨリ日ヨリケフ

す　連躰

古五　〇ぬれてかもぶちのきくの雨のまにいつちと成ハ行へ[illegible]ん

せ　已然

古一　〇ゝ[illegible]ゝ。せだ。柳さくゝをこきまぜて郭ぞくるの徐なり考る

せ　希求

古九　〇ちりぬるも香をぶにのこせ。」梅のむ高〳〵き附のおりひでゝ[illegible]せん

此類アグルニタヘズ多シ。文ニモ詞　天の川系ゝいくるゝいふ心を

よゝてさゝづきハさせ。せといひれれだ」ナト夥シ。サレバ例ノ挙ルニ

デモナケレド。俗言ニハ●のこせよ●させよトヤウニ多ク云故。童

蒙ノ為ニ其ワキラ示ントテカクニデ云ヘ。よ。モジ添レハ△才

ニト●佐行トサキニ示セル詞ノ活キニ混ル。　坎せ。ヨリ。ら。り。る。れ。ト活キ二役キハノ形状言トナル例次上進ム

△第四十三　●多行

た　将然

古八 〇そぐるなく秋の笹原鈴〜ちて接ゆ〜人をいつとうまつん

ち 連用

古十七 〇さちぬたぬきぬきぬ〜人もなき相をあふ山姫の布さらん

つ 截断

万七 〇琴とれバちげきさえぐつ〜くさ〜くもこの下ひこ素やこもれる

つ 連躰

古四 〇まつ人さわらぬ初瀬のけさなく変のめつ〜しきうる

て 已然

古 〇雲〜ぐ白ぬ山ざくものうるねこうぐひをぞなく

て 希求

古三 〇まてといふこちらでしこまるれあらバ行を採こるひまさま〜

コノてヨリらりるれト活ラケルハ下ヅるモジソヒテ才九ノ連躰言トナレル八

古十七 〇うく〜つををやつくさん言ぬの尾ゑたてる松あらるくふ

ノ類スベテ少カラス推テシルベシ 此外満てらん立てり立てれナドハ才九ノ形状言トナル例思ウテ知レ

△第四十四 ●波行

た 將然

古 〇年の内ゑ去ぬきにけり一ゑを去ぬまこやいたんと年こやいたん

ひ 連用

古十一 〇名ひいつるとさたの山の岩つてどいたねハこそうれこひ〜きれを

ふ　截断

○古八 あらんしてみるに後にそ。あまきるしやしもハこゑらん

ふ　連躰

○四二 こゝしより春ちりそむる梅むちるしらぬるハあしハさるらん

へ　已然

○古一 ちる来ぬと人ハいへども学のまうぬうぎりたつうぐとぞらふ

へ　希求

○四十八 今文さうふべき人もたもおえびハをむぐしてゆさりてへ

坎ぺニらりる主ノ文字ノ添ル中ニ才十ノ已然言トナル多シ其一ツ

○四四 ぬしちふぬ者ぞ白へれ秋の野ちうめさかりしふぎたうまそも

も　將然

○古二 ちるさめのふるハ後ちさらぬ花ちるを拾しまぬ人しまりれも

み　連用

○古四 おくむと紅葉ふぞぶなくちうの変きくときぞ秋ちうれしさ

む　截断

○イセ物語 いかりたかきちくの田長ハ犯しるのむ。ゞ仮さとに変しぬ後ぞた

む　連躰

○古四 まうこふるしうぞなくある女郎むおのうまむ野の花と志ぬや

め　已然

○古三 あしめどもこぎまもしなしに春霞ゆるなきしこちぬとなへだ

め　希求

○万九 旅人のやどりせむ野ニ霜ふらバわか子はぐくめ」天のたづむら

右等ノめ。ら。り。る。れ。ト活キテオ十一ノ形状ノ語トナレルハ。

○古 志かめる むと云ヽ よめる 身と云ヽ なやめる 不と云ヽ。ナホよめり 伝めれど 祇めらん ナド多カリ。

第四十六 ● 良行

ら　将然

○古三 桜花ちらばちらなんちらずとてふるさと人のきても見なくに

り　連用

○古六 梅の香のふりおける雪にまがひせバたれかことごとわきてをらまし

る　截断

○古十七 難波がた塩みちくらしあまころもたみのゝしまにたづなきわたる」

る　連躰

○古二 春雨のふるは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなけれバ
「ナモヲモ連躰言ヲ受ル定リ畧図ノ如シ

れ　已然

○古一 霞たちこのめも春の雪ふれバ花なき里も花ぞちりける

れ　希求

○万十 朝なさな我がみる柳うぐひすの来居て鳴くべき森にはやなれ」

右等ノれ。ヨリ又らりるれト活キテオ十一ノ形状言トナレルハ。

○古序 よにひのこれるがごとしと云ヽ 久しくとまれらバ 又 ○亦古二十 このした露は雨にまされり

ノ類イトヽ多シ・サテ又此希求言ニレハヨモシ添タルモアリ・仲文集卅七ニ入れよト三エタルナド・此ヿ上オ四十一ノ処ニ云ル趣ヲモ考フベシ・

〈第四十七　・將

ん　連用

○吉四　君やうんうれやもんのいざよひこ樣のうこ戸もさてぞ枝ぶり

「コレハ用ノ詰ヲ受タルノ・ト詞の玉の緒ニアレド・本ハ用ナルヲ躰ニイヒナセル上ナラデハノト受ルヿハ都テナキヿ・サレハ此哥ニテモんシコハ躰ニモルニテ・カノ「もさのまゝ」「ちの・のまゝ」ナド、全ク同例ト云ベシ・シカハアレド其躰ニイヒナサル、訓ハモト連躰言ナドナラズ・百ニ九十九ニデモ連用言ナル格リ・サレバカク躰ニシテノト受タルハ是卽チんハ連用言ヲカヌルガ故ト知ベキ・君やうんうれやもんに云ヘル処ナドニテハ・ニシテ連用ト云ヿ明ヘ・」

ん　截断

○吉七　淺やまいざこうてそうてやんう〜へゐる為と云やしゐるし

ん　連躰

コノんハ万葉ナドニ將ノ字ニタハ欲ノ字アテタリ・唐詩ニモ花欲然ナドハりえんゝもトコソヨムベキニ・りえんゝかつもトヨミ来レルハヨク思ヘバカナハヌヿ・サテソノ欲アルヒハ將ニアタルヿ自下ノんゞ〻〻んぞノ三ニナ同シ・サルコヽロセル図ナレゾ・意ラツケテミヨ・

○吉二　よ我こみそゆうん・ん・こ為のさるハひまつれよ枝をるとも

め　已然

○吉三　其こうんむのさうとまありなめど・あひうんことハ命ちりきり

サテコノん・ツギノ〻〻んぞハ・希求言トナルヿナレ・故ニ希求言ト書シテ横ニトホレル圖ノコヽニ至リテハ・○トアラハレテアルヘ・カヤウノヿスベテ聊ノヿモワケノアル畧図ゾ・凡ソニノ三看過スヿ勿レ・

△第四十八　●き

〔く〕　連用

古十七　○和田の原よせくる波のちもくもんまくのおしきむつしはもあ

〔あと受ルハ躰言故ニソノ躰言ニまくナルハモト連用故ナレバコソ躰ニ云ヒナサレテのノテニヲハニウケラルレ。〕

古十七　○ちふこちまくみせる夜もうゝ移くまくいはきものはそゝある

〔ちくゝ　あきゝ　ちくれト活ク故形状言ヤハリ用ラキトゝフベシ。コレ四種命ト大同小異ノ処。〕

〔ゝ〕　截断

古一　○きの中ゝ絶てさくゝのなりせバ去のこゝろたのどけくゝまくゝ

〔ゝ〕　連躰

古二　○蛙なくゝみぞのふふきちりこけりむのさりにけるまくゝおを

カク物ト云躰ニツヾケリ。まくゝをト歎ノ語ニツヲニ云ハンモ思

ベシ。歎ノニテレ恒ノニテレ。都テをハ連躰言ヲ受ル定例ニ。図ノ如シ

古一　○りくふこぞバあはハ雪くぞ降りあまし。〔コハ連躰ノ方ニツカヘル〕消ぞハ有ともむとこまくゝや

〔コハ截断ノ方ニツカヘル〕

上ナルハモト連躰言ナレドぞトカゝリテ截断セル例ニ。下ナル

ハ截断固ヨリニテソヤトウケタリ。キル、言ヲ受ルやハ畧図ノ

アラハセルやニテ諸活用言ノ截断言ヲ受ルニ。凡ソやハスヘテ連用截断連躰ノ

三ハサラニ。ラリニハ已然言ヲ受ルコトモアリテ其意オノく別ヘ。詞ノ上ニタツカ

ノぞのや何ノやハ連用ヲ受ルトモ連躰ヲ受ルトモニ通ズルヲ。此截断言ヲ受ル

やハサルカゝリノやトナルコトナシ。コノ意ヲエテ見ベシ。

〔ちゝ〕　已然

古十五　○人ちれぞたえなまくゝうぐゝひくゝもちきれぞとゞこいハまくゝおを

此まくゝかぞト云語出レバ。其末ヲバ必又まくゝ。ヒゾ大方ノ例ナル。

於イ　○佐ゝとる月日をたなむさのあふ長のうぐとおもたまくゝうぐ

○コレハ、まゝうバ嫌しゝまゝ・・・ニ意ヲ下ニ含メテ云ヒ残セル物ゝ。

○まゝて物語ヲ（ゲンヒ）をとらへゝらまゝ。うだ又ゝゝもちゝ糸ハかひせられ

「コハ截断ナリ」

なまゝよくゝらへぞありにけり

「コハ已然・但シ將然ノ中ニテノ已然ゝ。」

〈第四十九　・んぞ　コハ哥ニハ絶テヨヽヌナレト・中昔ヨリナニクレノ文ニハイトヽくオホカルヽユヱ別ニ図ヲ設ケ示セルゝ。

ぞ　截断、

○あゝのむきらんうへいあんぞ。』うゝるさきこゝをしのゝまゝゝ

後りあへり

○彼もゝのまうむゝへにくゝまうでゝん・ず。』

ずる　連躰

○さる正へまゝらんぞる。もいうゝゝ作ゝず

○あゝゝゝらんをいゝゞせんぞる。といひゝり（カゲロウ日記）

コレハいゝゝトカゝリテぞるト截断スルヲトト受タリ

ずれ　已然

○伊豆の山ゝ一和尚（イチヲ）なり給ハんぞ。よといひゝる（沙石九）

右ノ才四十七ノんめ、才四十八ノまゝ　まゝゝト云詞ハ、全躰ガ將然言ニテ其中ニテサラニ連用截断連躰已然ノ四ツ分ルゝ。タトヘバ書ニ眞行草アリ。其眞ノ中ニテ又眞行草アリ。行ニ又眞行草アル。ソノ眞ノ中ニテ行ハ一躰ノ行艸ニクラブレバ。タヾ眞ニ見ベキガ如シ。一コト三面白クウヽキ味アルヽ所ゝ。才三ノ（け）（き）（ゝ）ハ全躰ガ過去ヲカタル詞ナレド。其中ニテ

又ナホ將然ハけ已然ハ
ちゅト分ルヽト同理リ此冊九ノ造語ハ哥ニハナレ・但シ是モ元來ハ
此語ノ全躰ガ將然ナルヲ・其中デ分ルヽ將然連用ハ闕テ・唯
ず截斷ずる連躰ずれ已然ノ三用キヲ爲スヽ・何んずらんヲ何んずらんト
誤リ見テ悉ニ訝ルヿナカレ・
〇サテ因又略示トアルヲモ一ツ二ツ其例ヲ云ン・日本紀十四廿三あくらし
きゐるべのくくみゑゝ旨我那稽摩ハ・汝ガ無ケバニテコレ
縄・旨我那稽摩たれかけんよあくらの墨
ト將然言ウクル辭ニテ無ケヲウケタルヽ・万十五春日のゑゝ宇都之家米也母・
万葉コハオ三けノ下ニ類例ニスデニ出セリ・コヽニハヤサレク的例ニ引・こひしけばくるさとをせんゝ名為ヲ・古今
十四さくらふゝくさとのあくん・サテトヨ・又万十一なるた人あしびくゝや
の酢四くれどたのうつまこそとめつらちさ・日本紀仁德卷ニころも
こそ二重もよき・万十二むくろまきぬる妹もあらばこそ夜のさきも

うれゝくるべき・サテ又古今序・古風をうゝさて今をこひざらめ・
うもトイヘル如キヿ万葉ナドニ多シ・抑うもトヒてヲをたハ図ノ如ク連
躰言ヲ受テ・已然言ヲ受ル例ハナキヿヽ・然ルニんハ連躰截斷ノ二ツ
ノ活キニテソレヲ已然トスルトキハ轉シテめトナルシ・其めヽシモうも
ト受ルハイカニヒヽニコハ迄々モ已然言ヲうもト受ルニハ非ス・うもハ
決メテ連躰言ヲウク・サルカラニめうもヒヽヘルハ・めうむト同シサ一ニ
連躰言トセルモノヽトゾ知ラル・ヨクヽ考フベシ・サテ有リノリヲ連
躰言一テモカヌル言トシ・アルヒハ其活キれヲ已然ニ限ラズシテ截
断言一テモカヌル言トスルヿ・是亦古キトコロニハコレカレトアリ・サ
ルニヨリ畧示セル図ナルゾカシ・百姿の大家人ハいとまうれやヒヽヘ

ルナトハ。れ。ヲ截断言トセルニ。サテ又いざりせりこや
万葉。つまたてりこや
コレモ又万ナドハ。そ。ヲ連躰トセルニヤト思ハレ。これや。何ありト様ニ云ルモ
サヤウ欤ト思ハルヽカタヨリ図シテ。り。ヲハ連用截断連躰ノ三ツ
ヲカヌルサヽニテヅ一トワタリ示シハ置レタルニ。サレドコハイヅレモ
必ズト決メテニハアラズ。タヾ後学ノ精研ヲマツノミノワザゾ
トノ口説モアリキ。カヽルタグヒ又ハジメニイヘル一隅ヲアゲテ
三隅ヲ示スヿドモナド。オノヽ其意ヲ遡ヘツヽヤウヽオヒツ
ギ定考シテヨトコヽニモイヒサシオクニナン。
○サテトヨ△オ四十 ゐよ ノ左ニ聊本ヲ張リ云置シヿヲ。今コヽニ
クハシクイハントス。マヅ左ノ図ヲミベシ。

	著	似煮	干嚏	見	射鑄	居	
将然	キ	ニ	ヒ	ミ	イ	井	む まし ね まく ぬ ゑん ず め で ん ぞ
連用	キ	ニ	ヒ	ミ	イ	井	も て ね は つ ぬ や て に けん なむ ぞ き けり こそ し たり
截断	キ	ニ	ヒ	ミ	イ	井	らし らん べき と とも
連躰	キル	ニル	ヒル	ミル	イル	井ル	かな こそ まで ぞ に や を とも より も めし かな
已然	キレ	ニレ	ヒレ	ミレ	イレ	井レ	ば ど ども

八衢上巻六・左 るわざをそへてさそふ詞と續く詞とを分つるは後の定りにてふるくは万葉十ノ十左春野のうはぎつみて煮良思 又古今集に花とやみえらん 六帖六に松がえのささなり似へき
後撰集に来てみへき人もありしな土佐日記に似べきなしとあ

二音いきさひみおよりゐるてこをえを用ひさ
り」トアリ・ゲニシカルコヘ・サレドるりゑをえてこ〻後の宮りト
イヒ・用ひさりトイヒステタルハアカヌ云ヒザニ〻・コハるりゑをそ
へてきるゑ〻ゐ〻つゑ〻ゐをかゑ〻るハまゑ大ゑこの宮りなれど・
古くよろ後〻までも方葉ふこ玄冊のうききつこて煮良思も
云〻・才二音をげべきらしらんあ〻愛ゑるもヌゆうらぎ」ト様
ニ云タランゾヨカルベキ・うつお茂原君巻ニきのハえ「ら」・枕冊子ニ大ゑ人
ナド・古キ処ニ云ガタク・シカノミナ　も移ゑるこさきゑこおさから「ん」あやゑ〻てトアル
ラズムゲノ近キ物ニモ猶アル例ゑ・サテコレラバらし　らんべきノ助辞ヲバ
スベテハキル〻言受ルナレド・右ノヤウニミエタルハ助辞連用言ヲ
受ルコモアル〻トイフベキニヤトモ思フ人アラン欤・ソハワロシ・コレ

ハら「ん」らし「べき」ハ普通ノ例ノ丁〻ニキル〻言ヲ受ル定リトシテカキ
テ・其ら「ん」べき「ら」しシテ受ルハ・是レ卽チ居見ナドノる・りヲ截
断言ニ云ベキ例ゾ云ベシ・サルニヨリテ上ノ件ノ如クニハ図示シタ
リシ〻・猶又コレヲタシカニセバ・万葉六よろづよ見友あうめや・
同十弟代ゑろづさそうみてあひ見鞆・コレヲモ同十八ナル羨等母
あくべき浦をうな〻に・又二十つら〻〻羨等母あうめや・又ちバ
ちバ羨等母あん君ゑうもナドカケルニ合セテ・何レモ見ラ〻もトウ
ケタルハみハコレ截断言ノ証トスベシ・抑てこをえドモノアルガ中ニ・
と「と」もう〻ノ三ツト歎息ノをト問カケノやトナドハ・諸活用言ヘ
オシワタリ一貫シテ決定イハユル截断言ヲ受ル格ナル丁・略図ノ

図ヨリ〻〻テデカケテ三バオノヅカラ明ナルベシ・ナホ云ハヾ万葉九ニ・ゝづのえの浦洲の子之家地見トアルハ・いへゝころをミトヨミ・一巻ニよさ人のゝよさ人四来三トアルハよさ人よゝみトヨミテ・みゝテサレク截断言ニセルモノト云ベシ・玉の小琴ニよゝみハみゝよ伝ヘトトケレド・一段ノ活言ヲ其下ニテ希求言トスル例ハナキヿヘヨク〻考フヘシ・右ノ二首トモ其全躰ノオモムキモ・みゝハ大カタハるモジノハリテ見るト云ヒスウル意トミテカナハザルニアラズ・考ヘシ・サテ又万十巻ニ・玉さハるとゝ心のへゝろゝにゝ錐立錐居君がまゝにまれトミエタル・錐立錐居ヲモ〻ろゝもゝ訓ミテ・ゐハツ子ニハゐるト云ルニ同シ・錐見ヲ見〻ゝ伝ヘルガツ子ハみるゝ伝ヘルニ同シキラモテ例知スベシト云テヨケン・錐立錐居ハ仙覚本ニハタチテモ井テモトヨメルヲ・鈴屋ハコレヲハ古訓の如くたちてもゐてもゝよみてハ哥の名ヨリハ也・たつゝもうゝもとよむヘシ伝ヘリ・サテ又百首異見ニハたちもゐゝトヨメレド・たちゝもト多行四段ノ活語ノオ二音ヲゝもト受ルトネヿハカツテ例ナキヿヘシ・シカレドモ次ナル雖居ヲ・ゐゝもハ暗ニ叶ヘルヨミサテヘ・コヲうゝもト訓ムベシトノ説ハ・崇神紀ノ急居ヲつきうトアル訓註ヨリ考ヘテノヿナメレド・カノ錐見ヲむゝもトハヨムトジク・必みゝもトヨムヘキヿ・イハユル義等母ニテ明ナルニ例准スルニコレ必不可ヘ・ころゝもゐゝもトヨムベキコト上ニ云ル如ク・思フベシ・

或人問ヘラク・作用ノ語モノキルヽ処ハ大方皆五十音ノオ三アリテ㋒韻ノ音モヘ・オ二㋑韻ノ音ヲ截断言トスルハ形状言ニ限ルニアラズヤ・答・妥問ハゲニ謂レタレド・形状言ニ中ニモ不ハ㋒韻ニテ截レ・作用言ノ中ニモ将ハ㋑韻ニテ断レ居レリ・一段活ノ㋖㋔ナドノ㋑韻ニテ居ランヿアルヿジキニモ非ルヘ・但シザハ万葉ナドニコモミユ〻づきをゝりコナドイベリト不知ハ正シキ作用ノニラカヌルバカリナレド・亦ハコレラバ截断言ヲモカヌルヘト上ニアラハセ図ノ如ク心得ザレハ・云ヒザテハ形状言ハ㋑ニテ三ナ截ルヽ例ゾト謂シカノ将字ニアタルランキハ正シキ作用モイヒガタキコヽチレ・不ハ又形状トノミモオモハレズナド論ジテカニカクニ作用言ノ㋑韻ニテ居ランハイカヾトイフ人モアラメド斯クテ此一段ノ活キノきゝひみいゐ・ヒヅノ定リハオ二音ノヒニテハ・将然連

今はむかし世になかりける積あるじ山上まゐりとて
大和の国の物しりにつかへ都にまゐりてよろこび
ふかきをこらしけるにはるかに六条なる寺を
たづね人の九如堂にしてやどりあるさしきの故いそれ
書博といふ書をみてけるに志の論いひともせうしその
人のおもむきてハいと心をとめわたりて此書を須なかれた女里
もうそれも五十丁の書ともいふ指をあかれる旅をしたれど
かゝらひのなきにはなさとるゆゑに紙あこし其本出
読つゞけんとしけるに心ちよりて大徳あり

「花とやえらん」「これに似べきハ」「つゝて煮らし」ナト云ル詞用ヒヨクヅカ
腹ニ味ハヽレズ。えどもあやめや伝ヘルハ一トシテ解セザルヘシ。コレ然ル
ヲ何トナク自オラニ解セテアル様ニ思ハ。ヨク正セバワレ乍ラアヤシ
キ𪜈トゾ誰モ思ベキ。サテコヽニ聊云置べシ。くらげなす冬木
のもとナドノのたまはハ。コノ畧図カノ友かゞみナル図𪜈ノ中
ヘハ入リガタキヤウニ思ハル。此〻活語雑話二編六丁ニテ曉メテヨ
小子。

かゝる事は杜撰せさせたまふまじとさとし給へれしと
そのこと従ひけるまゝはしめにて今ハ師とそのことてなむ
さる道にこそ遠けれと唐にハ作ハ志もしあるをさる
便よろしき和語説ハ略図といふ二ひらに題号をつけいふも
あり経えらむに覚えて甚しくかはひ方あらせしるす
乃首ひけるに何やしむハさる事そらし此略図ハ中にハちまきなりと
略令図と題つけて梓りしをいまそ梓ることゝなりぬ今乃
ありけるをとりしも本宗乃書とするまて和語なる
うきつるもやむやと講説せしかときく人乃ちきとみて

表には真宗聖教和語説と名つけられたるあまたあり
乃一ひらを続きあはひにて和語説を兼ねたりけるを
あれなむいとよろしきとてさやうにはつけてやそのこへハ
段略図せられたまへて和語説に係る略図といふ意をと雖
その方ひおほかたせまきに続ら誤りに其国書ハさらに此図乃出たる
さくるいつものも係るを続ゆ本意ひし甚再ひ此ま出をと
また深くえせたまひたるなむ此活語指南といふ
書ありけるいつはりくは見えまて紛る略図乃たるやうなき
やうにれおらるられしき方ないふとるゝふとく覚ゆるなま

理よりうるをわれらやはとそしり又さらにまうして
たむ抑いまし穿鑿詞の林乃おもやうあるやうを知
ものこの業人のうちにあるものの書をもて教ふ
教ふるをとくこんようしさはよの廣くも長くもとそ
思ひおもく此教ハ物の文ならぬ千歳も旬乃榎木
物本とあるる書ハ諸人乃腹よ熟くいれよもて義乃裏
とうちはめふまもて獨りうちをやうかうもて人よりき
ひうしぬるは天保十二年三月廿七日

上毛野國葉鹿郡新井村　新井守村

若狭妙玄寺義門大德著述目錄

山口栞	三冊	さし絵の像	合卷一冊
活語指南	二冊	像乃ちりて	
活語雜話初篇	一冊	友鏡	一折
同二編	一冊	同底迺影	冊
同三編	一冊	活語餘論	冊
奈末之奈全書	三冊	玉比緒くりうき	三冊
類聚雅俗言		於乎輕重義	一冊
和語說略圖	一折	月草	卷數未定
以上			

天保十五甲辰年孟春

發行　京都　勝村治右衛門
　　蛭子屋市右衛門
　　大坂　河内屋　儀助
　　英屋　大助
　　江戸　岡田屋　嘉七

書肆